

福岡工業大学 学術機関リポジトリ

オンライン海外研修プログラムの実施報告—Virtual ECO-STEP におけるルーブリック評価の可能性—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福岡工業大学 教育開発推進機構 公開日: 2023-09-06 キーワード (Ja): キーワード (En): Overseas Study Program, Educational effectiveness, Rubric 作成者: 片岡 雅世, 橘 雄介, 藤井 洋次 メールアドレス: 所属: 社会環境学科, 社会環境学科, 社会環境学科
URL	http://hdl.handle.net/11478/0002000013

オンライン海外研修プログラムの実施報告

—Virtual ECO-STEP におけるルーブリック評価の可能性—

片岡 雅世 (社会環境学科)

橘 雄介 (社会環境学科)

藤井 洋次 (社会環境学科)

A Report of the Online Overseas Study Program - Possibility of Rubric Assessment in Virtual ECO-STEP Program -

KATAOKA Masayo (Faculty of Social and Environmental Studies)

TACHIBANA Yusuke (Faculty of Social and Environmental Studies)

FUJII Yoji (Faculty of Social and Environmental Studies)

Abstract

This paper focuses on an online study abroad program and discusses its educational effectiveness. The measurement of educational effectiveness using rubrics will be addressed. In addition, an attempt to assess students' competencies will be presented.

Key words: *Overseas Study Program, Educational effectiveness, Rubric.*

1. はじめに

社会環境学科では、環境に関わる諸問題を解決できる実践型人材の育成にむけて、学生がグローバルな視点から海外の環境に関わる諸問題を体験し、学修への意欲とグローバル人材としてのコンピテンシー能力の向上を目的に学部独自の海外研修プログラム (ECO-STEP) を実施してきた。初年度にあたる 2019 年度は、学生の海外派遣を実施できたが、2020～2022 年度は、COVID-19 感染拡大によって海外渡航が世界的に制限されたため、オンラインに切り替えて海外研修プログラム (Virtual ECO-STEP) を継続してきた。

その教育効果については、2021 年度以降、ルーブリックを用いて参加学生のコンピテンシー評価を試みてきた。本報告ではその内容について紹介する。

1.1 プログラムの概要

本プログラムでは、海外 (シンガポールなど) の優れた環境管理の実績と SDGs を目指した取り組みに対する理解を深めるため、海外環境施設などの視察、また海外の大学生と気候変動問題や SDGs に関わる意見交換をオンラインで実施している。

研修プログラムは 1～2 年生を対象に、プログラムへの参加意欲などを条件に毎年度 10 名程度を選抜して実施している。研修は 3 日間各 2 時間程度である。参加学生に金銭的負担はないが、事前研修への参加、事後報告書の提出およびプログラム報告会での発表を義務付けている。研修では、体験の学修効果を確認するためにルーブリックを導入し、研修前後に自己評価することで学生自らが研修の意義や目的を自覚し、今後の自身の取り組みを明確化することを目指している。

2. 事前研修について

2.1 内容

本プログラムでは研修当日に先立ち研修を行っている（本稿では「事前研修」と呼ぶ）。事前研修の目的は研修当日に向けて形式的及び実質的な準備を行うことである。日程等は以下の通りである。

- ・ 時期：研修当日の1ヶ月前頃から
- ・ 回数：3回程度（各年度ごとに日程調整を経て判断する）
- ・ 時間：各回1時間半程度

事前研修の内容は研修当日に向けた形式的準備及び実質的準備の二つに分かれる。形式的準備は研修当日に向けた事務的な準備である。その内容は以下の通りである。

- ① ECO-STEPの目的の確認
- ② 日程の確認
- ③ 研修当日の班分け（後述）

実質的準備の内容は以下の通りである。

- ① 英語による自己紹介の練習
- ② 英語によるコミュニケーションの練習
- ③ 英語による日本の社会・文化などの紹介の練習
- ④ SDGsの予習
- ⑤ シンガポールの社会・文化などの予習
- ⑥ シンガポール側のプレゼンテーション資料の和訳

実質的準備の①は学生に英語の自己紹介を用意させるもので、②は英語によるコミュニケーションについて教員からヒントを与えるものである。たとえば、日本語のカタカナ英語、いわゆる「日本語英語」が実際の英語の意味と異なる場合があること（「ホビー」と“hobby”など）に注意を喚起している。

実質的準備の③は学生に英語で日本のことを紹介させるものである。後述の通り、研修当日に日本について本学の学生からプレゼンテーションをするが、その準備をさせるものである（内容は、表1を参照。④・⑤も同じ）。

以上①から③は、総じて、英語によって表現することの難しさを学生に意識させ、研修当日までにできる限り準備をする必要性を認識させるものである。

実質的準備の④・⑤は研修当日に向け、議論のテーマであるSDGs及びシンガポールについて予習するものである。学生には日本語のプレゼンテーション資料を作成させ、覚えるべき英単語も記載させるようにしている。⑥も予習で、後述の通り、研修当日にシンガポール側からのプレゼンテーションがあるため、その資料を事前に学生に和訳させるものである。

表1 実質的準備③から⑤の内容

日本（英語）	SDGs	シンガポール
地理・人口、歴史など	SDGs（概要）	地理・人口
経済		歴史（民族・近現代史など）
COVID-19対策		文化（言語・宗教など）
日本の水道施設		経済（有名企業など）
SDGs14:プラスチックごみの削減		

2.2 結果

事前研修について、2022年度の学生アンケートの結果は図1・図2の通りである。

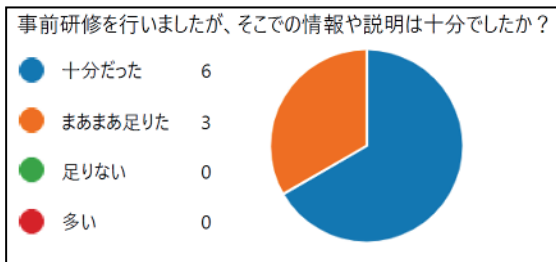


図 1 事前研修のアンケート結果(1)

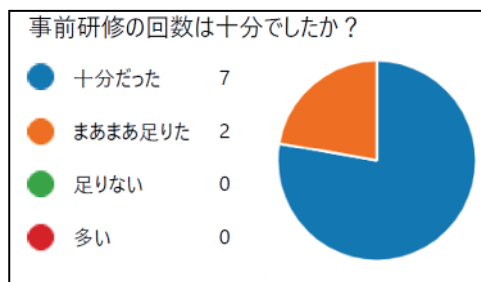


図 2 事前研修のアンケート結果(2)

十分な情報提供だったとする意見が多数を占めているが、一定の不足感を感じている学生もいた。この理由を探ると、「まあまあ足りた」と回答した学生は研修内容の改善点・感想についてのアンケートに「英語のテクニックのようなものをもっと聞けたらよかった。」、また、「母国語じゃない言葉でコミュニケーションをとる難しさや自分の課題を見つけることもでき、良かった。」と回答している。すなわち、学生の中には単純に英語のコミュニケーションの経験を得ることだけではなく、より高度な技能を得ることを目指している者もいることが示唆されている。このような需要に鑑みると、今後の本学の留学プログラムを検討する際には、単に留学先を手配するだけではなく、技能を修得できる機会を与えることも視野に入ってくる。

3. 研修当日について

3.1 内容

本プログラムでは以上の事前研修等を経て、シンガポール大学生等との研修を行っている（本稿では「研修当日」と呼ぶ）。日程等は以下の通りである。

- ・ 時期：3月初旬頃
- ・ 回数：3日間程度
- ・ 時間：各回1時間半程度

研修当日の内容について、2022年度は以下の通りである。なお、研修当日の内容は旅行代理店との調整により決まるため、各年度で異なる。

- ① シンガポール市内（環境に関するガイドを含む）オンラインツアー
- ② シンガポール大学生及び本学学生によるSDGsに関するプレゼンテーション
- ③ シンガポール大学生とのボディ交流（2日間・計2時間半程度）
- ④ シンガポール大学内キャンパスツアー（ボディ毎に実施）

研修は図3の通り、オンラインで行った。

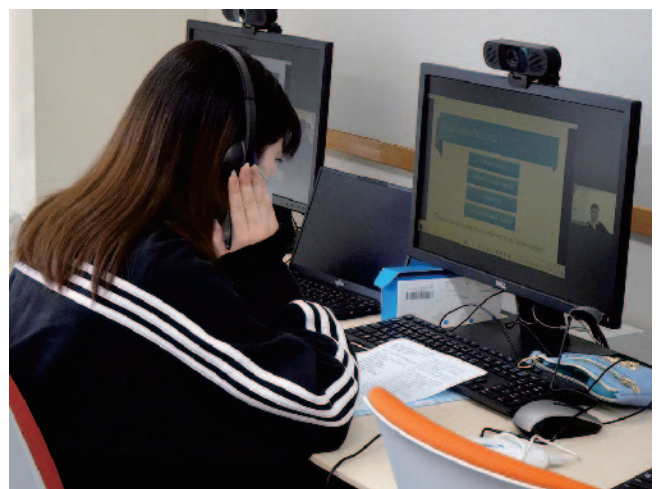


図 3 研修写真，英語でのプレゼンテーション

- ①は旅行代理店によるもので、シンガポール市

内をオンラインで案内してもらうものである。使用言語は英語である。ツアー中に質疑が可能である。

②は双方の大学生からの SDGs に関するプレゼンテーションである。使用言語は英語である。

③は大学生同士の交流である。学生は数名に分かれて班を作る。その際、シンガポール大学の学生一人に対し本学の学生は二人となる。一対一としなかった理由については、言語能力を加味したものである。

④はシンガポール大学生にシンガポール大学のキャンパスツアーをしてもらうものである。

3.2 結果

研修当日について、2022年度の学生アンケートの結果は図4・図5の通りである。

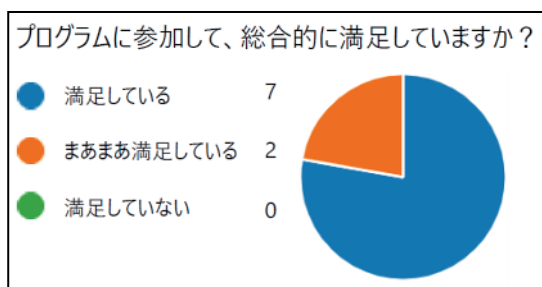


図4 研修当日のアンケート結果(1)

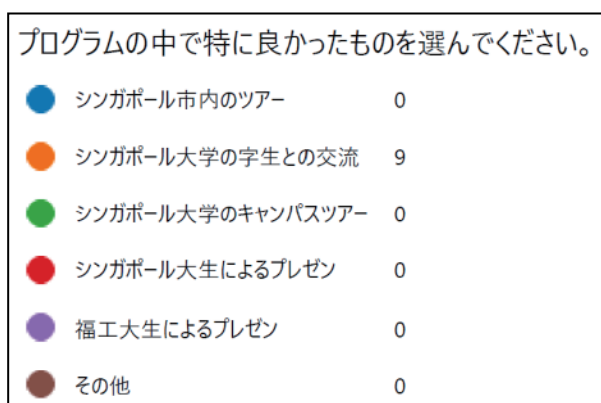


図5 研修当日のアンケート結果(2)

これによると、本プログラムは好評で、研修当日では特に前述③のバディ交流が顕著に好評だったことが分かる。

以上のように研修は好評だが、課題もあった。一つは日本側からのアウトプットである。研修当日の内容の多くはシンガポール側からのインプットで、日本側からの予定されたアウトプットはプレゼンテーションのみである。もちろん、バディ交流において各学生が日本のことを話してはいるが、プログラムとしてのアウトプットを増やすべきかという問題である。この点、学生アンケートでは「日本〔の〕大学のことも紹介して回ったらいいと思った。」(〔〕内筆者)との意見があった。検討に値しよう。

もう一つはネットワーク環境である。研修内容の改善点・感想についてのアンケートでは、「ネットワークの環境の改善」について学生から指摘があった。実は、例年、ネットワーク接続が中断し、また、音声聞き取りづらいなどの問題が生じている。これは本学のネットワークの問題というよりも、シンガポール側のネットワークの問題もあり得る。というのも、シンガポール側の大学生は自身のモバイル端末から参加している学生が多く、その音声及び映像のなめらかさはまちまちである。これはオンラインならではの問題で、解決は難しい。もっとも、簡便さというオンライン留学の良さもあり、今後は実地の留学との役割分担を検討すべきだろう。

4. 研修後の振り返り

研修後は、後述の通り、ルーブリックによる学生自身の振り返りを行う。これに加え、学生による報告書の提出及び研修報告会を通じて、参加者同士で研修を振り返り、また、その経験を他の学生にも共有している。

5. ルーブリックを用いた学生の自己評価

5.1 ルーブリックとは

ルーブリック (Rubric) とは、「マトリクス形式で表した学習成果の評価指標」¹⁾のことで、「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」²⁾とも言われる。

一般的に、学習到達レベルを示す数値的な評価尺度と、具体的なスキルや知識を記した評価観点(評価基準)によって構成されており、学生による自己評価や自己改善、あるいは研修成果の可視化などにおいて効果的であるとされている³⁾。日本においても、近年、レポート課題やプレゼンテーションなどの(自己)評価にあたって用いられつつある。

ルーブリックには、用いられる場面やその目的などから様々な様式があるが、代表的な例の一つとして、米国大学協会(AACU: Association of American Colleges and Universities)が開発したVALUE(Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education)ルーブリックがある⁴⁾。日本では、特に海外研修や海外交流のルーブリック

作成時にこのVALUEルーブリックをベースにしたものを使用することが多いようで、本研修でもVALUEルーブリックをベースに作成されたと思われる九州工業大学のルーブリック⁵⁾を参考にしつつ、本研修に合わせて修正したものを利用した(図6)。

5.2 学生による自己評価と本プログラムの意義

本研修では、①多様な文化受容・寛容性、②コミュニケーション力、③課題発見・解決力、④自律的学習力、⑤様々な環境問題への理解、⑥グローバルな志向性について、それぞれ1~3つの教育目的および教育目標を挙げ、研修前および研修後にmasterly(3), advanced(2), basic(1), below basic(0)のいずれに当てはまるか自己評価しても

分類	教育目的	教育目標	masterly	advanced	basic	below basic
			3	2	1	0
多様な文化受容・寛容性	多様な文化理解	交流地域の文化多様性を理解できる	文化の多様性から生まれる交流地域の多様な現象を認識できる	宗教・民族・文化など複数の語彙を理解できる	一つの事例を理解できる	どれもあてはまらない
	多様な文化の尊重・寛容性	多様な価値観を持つ文化や意見にオープンな態度をとることができる	常にオープンな態度をとれる	オープンな態度をとれる時がある	言及はできる	どれもあてはまらない
	グローバルな関係性理解	交流地域と日本さらに世界規模の相互関係を理解できる	交流地域・日本・世界規模の関係性を理解できる	交流地域とその隣接国と日本の関係を理解できる	交流地域と日本の関係性を理解できる	どれもあてはまらない
コミュニケーション力	自己表現	異文化コミュニケーション実践に際し、異文化を自己対峙することができる	逆世を自覚しコミュニケーション時の行動に活かすことができる	自分の声を理解し異文化コミュニケーション時に適性を発揮できる	自分の特性を理解できる	どれもあてはまらない
	共感(エンパシー)	異文化と接する際に共感し対応できる	異文化の価値観を理解し尊重しながら接することができる	共感を促して異文化の人や社会に接することができる	共感と同意の差いが分かる	どれもあてはまらない
	自己表現(アサーティブ・コミュニケーション)	相手の意見を聞き自分の主張もしながら会話を円滑にする(アサーティブ・コミュニケーション)	アサーティブなコミュニケーションを異文化に対してとることができる	アサーティブ・コミュニケーションの重要性が分かる	褒め、攻撃、アサーティブ・コミュニケーションがどんなものか分かる	どれもあてはまらない
課題発見・解決力	情報収集	自らメディア・文献を用いて情報収集し、所見を評価するための調査分析することができる	課題解決に必要な情報を整理し他者と共有できる	自分で調べて調査対象を広げることができる	与えられた課題を調べることができる	どれもあてはまらない
	多文化意識ワーク	多様な背景を持つ人々とともに共通の課題に奮闘して取り組むことができる	課題解決に向けた最善の方法を全員で見出すことができる	共通課題の解決について意見を出し合うことができる	共通課題を共有できる	どれもあてはまらない
自律的学習力	自主学習	海外交流に必要な知識を得るために自主的に学習することができる	自ら機会を見つけて学習できる	自発的に学習機会を見つけて参加できる	指示された学習機会に参加できる	どれもあてはまらない
	継続学習	海外交流後の半ば、その後のキャリアに向けた学習課題を設定し学習できる	自身のキャリアや次の交流に向けた目標を設定し学習を継続できる	次の交流を直視し学習機会を待つ参加することができる	海外交流での半ば目標を設定し、下記への学習ができる	どれもあてはまらない
	協定学習	協定の語学力を自覚し能力を伸ばすために自己学習を続けることができる	目標を決めて語学・テストを克服する	自分の語学レベルを認識し、学習機会を見つけて実践できる	自分の語学レベルを理解できる	どれもあてはまらない
さまざまな環境問題への理解	基礎知識	専門分野の専門的な知識を得るために自主的に学習することができる	自分分野を定着し学習できる	指示された分野の学習ができる	指示された学習機会に参加できる	どれもあてはまらない
	環境問題に対する幅広い視点	科学技術に関して幅広い視点を持って問題の解決にあたることことができる	もの見方や考え方の日本との違いを理解し、それを活用することができる	もの見方や考え方の日本との違いを理解できる	もの見方や考え方の日本との違いに気づくことができる	どれもあてはまらない
グローバルな志向性	グローバル環境における自己価値を持ち、目標と理想に向かって自ら学び続けることができる	目標や理想にどれだけ努力すれば到達するかを考え実行できる	自己価値と理想の差が明確である	目標を持つ	どれもあてはまらない	

(山崎) 九工人・国際環境学会資料を参考に作成。

図6 利用したルーブリック

らった（図 7）。

その結果，一部を除けば，研修後はほとんどすべての教育目標において below basic を選択する者がおらず，成長実感の高さが明らかとなった。特に，多様な文化の尊重・寛容性や共感（エンパシー）の伸び率が高く，本研修の目的の一つである異文化理解が進められたといえよう。また，自主学習や継続学習，語学学習など大学生活を送るうえで必要となる基本的なスキルについても本研修を通じて身につけられたようである。さらに，環境問題への基礎知識および環境問題に対する幅広い視点についても成長実感が高く，本研修が社会環境学部独自に実施されている意義を見出すことができよう。

6. まとめ

本報告は，社会環境学部が独自に実施してきた Virtual ECO-STEP について紹介してきた。海外の環境施設や海外学生との交流は，学部教育による「知識」と結びついてグローバル人材としてのコンピテンシーの獲得につながることを期待しているが，ルーブリックを用いた学修成果の検証では，一定の効果を確認することができた。しかしながら，ルーブリック評価が研修による学修成果を完全に評価できるわけではなく，その限界を把握したうえで活用していくことが重要である。

学生自身によるルーブリック評価を活かすためには，研修後の学生との面談にルーブリック評価結果を活用することが重要である。学生自身が研修前後の自己評価の変化を確認することで自身の成長を確認し，今後の学生生活の中で身に付けるべき能力や課題を認識し，自立的な学修姿勢の形成につながることを期待している。実際，参加学生の多くは，研修後に SA・CS や学科環境サークル「エコ FIT」メンバー，GSL メンバー，国際連携室プロジェクトに参加するなど学科内で主導的なリーダーシップを発揮している。また，現地学生との英語コミュニケーションを通じて各自の英語能力を客観的に確認し，新たな目標設定の機会

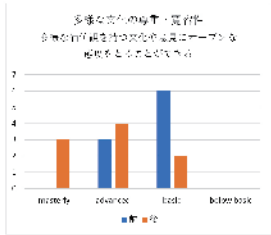
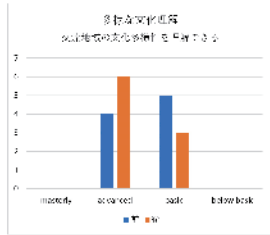
となっている。参加学生の中には研修後に TOEIC 840 点を獲得した学生も出てきており，他の学生への刺激となっている。

今後，ポストコロナでの海外現地派遣プログラムへの復帰を実現してプログラム内容を充実化するとともに，その教育効果の検証を通じて改善を図っていく予定である。

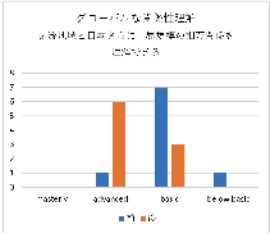
【参考文献】

- 1) 井下千以子 [2019]『思考を鍛えるレポート・論文作成法 [第 3 版]』慶應義塾大学出版会，155 頁。
- 2) ダネル・スティーブンスほか(佐藤浩章監訳)[2014]『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部，2 頁。
- 3) 井下 [2019] 155 頁，スティーブンスほか [2014] 16 頁。
- 4) スティーブンスほか [2014] 157-159 頁。
- 5) 九州工業大学『教育ブレティン』(第 11 号，H26 年版)，9 頁，2015 年。

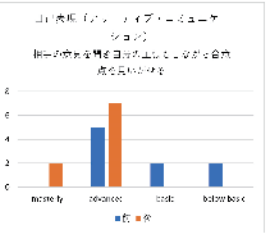
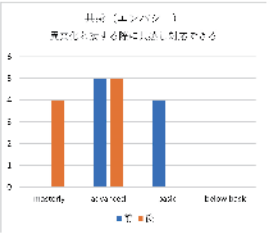
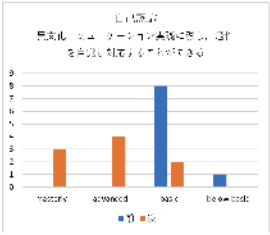
多様な文化受容・寛容性



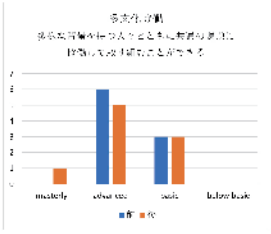
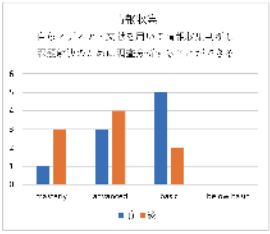
(単位：人)



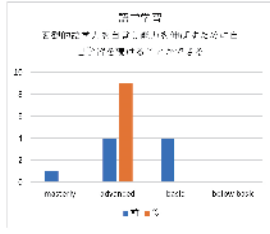
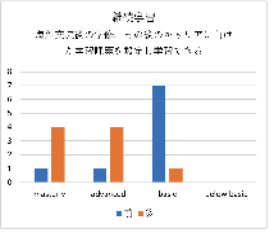
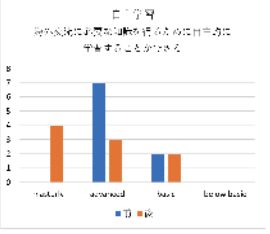
コミュニケーション力



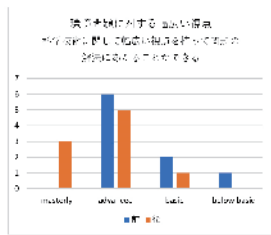
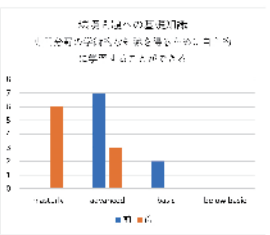
課題発見・解決力



自働的学習力



さまざまな環境問題への理解



グローバルな志向性

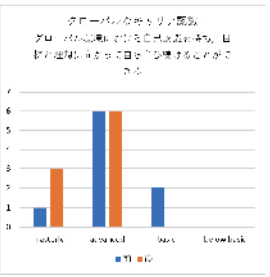


図 7 ルーブリックを利用したオンライン海外研修プログラムの自己評価 (事前評価と事後評価の変化)